特集

ラグビーという文化

二〇一九年九月に開幕したラグビーワールドカップ二〇一九日本大会。本特集ではアジアで初となる日本での開催にちなんで、ラグビーをとりあげる。「植民地」とラグビーの意外な関係や、試合前のパフォーマンスから見える各地の文化など、さまざまな切り口からラグビーの世界の奥行きを考えてみたい。

ラグビーワールドカップ2015　プールB第3戦　日本代表 対 サモア代表（提供：日本ラグビーフットボール協会）

ラグビーが映し出す「世界」

石井昌幸（いしいまさゆき）　早稲田大学教授

ラグビーの日本代表チームには、日本国籍を有しない選手が多数含まれている。なぜだろうか。旧英領を中心に広まったラグビーという競技の世界史は、イングランド、スコットランド、ウェールズ、アイルランドという、イギリス本国の四つの「ネイションズ」による「北」と、南アフリカ、オーストラリア、ニュージーランドを中心とする「南」との対抗軸により展開してきた。のちに、「北」にフランスとイタリアが加わり、「南」にフィジー、サモア、トンガに代表される太平洋島嶼（とうしょ）部が加わって、今ではそれに日本、アメリカ、カナダなどが参入して新時代を迎えている。このように、ラグビーの伝播（でんぱ）史は、イギリスの「帝国だった過去」と深く結びついている。

国籍主義と協会主義

もともとイギリスには、日本人が考えるような「国籍」という概念がなかった。英国王室の臣民（ブリティッシュ・サブジェクト）は、イギリスで生まれても、植民地で生まれても、法制度上は同じ地位を保証された。だから、例えば一九〇五年に初めてニュージーランド代表が渡英して旋風を巻き起こしたとき、あるいは一九〇六年に南アフリカ代表がロンドンのピッチに立ったとき、両チームの代表選手たちは同じパスポートのもち主だった。

二〇世紀に入るころから、植民地のイギリス系住民たちは頻繁に本国に挑戦するようになり、植民地間の対抗戦もすでにおこなわれていた。ラグビーの世界的普及はこのようにして始まったのであるが、このとき南半球に住む「イギリス帝国臣民」たちにとっては、各々の植民地ラグビー協会以外に、選手として「代表」すべき帰属先というものはなかったのである。ラグビーの代表制度が、「国籍主義」ではなく、いわば「協会主義」であるのは、このような歴史に由来している。

代表チームとは何か

それではラグビーの代表制度は、たんなる植民地主義の遺制なのであろうか。「ラグビーの日本代表チームには、なぜ外国人選手が含まれているのか」という問題は、裏を返せば、そもそも「代表チーム」とは、誰を、何を代表（レプリゼント）しているのか、という問題をわたしたちに投げかけている。スポーツの代表選手は、選挙で選ばれるわけでも、すべての国民にかかわる行為をしているわけでもないのだから、厳密にいうなら「国民を代表している」とはいえないであろう。彼ら彼女らが「代表」しうるとしたら、まずは、その国や地域の当該競技の協会に加入して登録料を支払っている人たちであり、次にそうした人たちの周囲でそのスポーツにかかわり、支えたり応援したりしている人びと、要するに日本のラグビーなら「日本ラグビー界」ということになるはずだ。だとしたら、むしろラグビーの代表制度の方が、「国籍主義」であるサッカーやオリンピックよりも理にかなっているようにも思える。

もちろん、このような考えに強い違和感を覚える方も多いであろう。例えば高校野球で、他地域出身の選手で占められたチームを地元の代表として応援する気になれないのと同じような感情が、代表チームに対しても働くことはじゅうぶんに理解できる。これは逆に、一国の代表選手となるために出生地や居住地を捨てて、他国の国籍を取得する「スポーツ移民」への違和感にも通ずる感情であろう。ナショナリズムには、政治的・法的な原理では片づかない、父祖伝来の土地、母語や方言、食文化、共通の身体的特徴などの、ある種身体化された情緒的ウチソト意識、いわば感情の共同体としての側面があるからだ。そうした感情を、ときにスポーツは強く刺激する。

しかし、このような感情は、日本生まれであるが親が外国出身であったり、日本国籍であるが海外で育ったりといった、多様な背景をもつ選手に対する情緒的な排除を生みかねない。その意味で、ほんらい植民地主義から始まったラグビーの代表制度は、現代では逆説的に、さまざまな出自の人たちが交錯するトランスナショナルな「世界」、そのひとつとしての日本という「場」の姿を代表＝表象（レプリゼント）するものとしての新しい可能性を秘めているのではないかと思うのである。

1971年に開催された国際親善試合（イングランド 対 全日本）のポスター（提供：秩父宮記念スポーツ博物館）

ラグビーワールドカップ2015　プールB第3戦　日本代表 対 サモア代表
「シヴァ・タウ」を演じるサモア代表に、肩を組んで対峙する日本代表（提供：日本ラグビーフットボール協会）